イノシシ野生牧場の建設

九州の山が広い範囲で杉やヒノキの人口林に変わってしまった。戦後から長い間、「成長する国富」として林野庁のみならず一般国民も植え続けてきたからである。材木の国際的な需給関係から採算が取れず、伐採の適齢期を迎えているにもかかわらず放置されて山は荒れている。（宮崎県など中国に輸出しているところもある。）

副作用の一つとして、風土性豊かな照葉樹、闊葉樹が失われたために、イノシシの餌が少なくなって里の畑を荒らす。山に近い農家にとっては大敵で、害獣としてならば夏でも駆除してよいことになっている。（正式な狩猟期間は、１１月半ばから２月半ばまで。）

イノシシの生存権が、樹木の国際相場によって左右されているわけである。

一方、穀物自給率が４０％を切っても平然としている珍しい国なのに、食事の食べ残しは４０％にもなると聞いている。それをイノシシに与える方法はないものだろうか。

イノシシは広範囲を移動するものの、山の連なりから離れて都会に住むわけではない。つまり、彼らも一定の範囲に住むわけで、その地域の一部を動物公園に指定して、囲い込みを行い、家庭や飲食店からの残飯を与える。

とはいえ、ことは容易ではない。残飯は、主として都会に大量に発生する。この残飯を収集し、高速道路等を経由して運搬しなければならない。経費もかかるし、腐敗を止めるにはどうすればいいか、課題だ。

ともかくも、そうして太ったイノシシが半分家畜のような身近な存在となったとしよう。

これから、都市農村の交流、グリーンツーリズムなどが益々盛んになってくるだろう。

田舎は彼らを歓迎するために工夫すべきだ。たとえば、山里の住まいはヒノキの風呂とか杉の家で歓迎する。食については、ヤマメ、山菜、イノシシ鍋で歓迎する。照葉樹林の中に身を置くだけで心身共に癒されるものである。

住まいに使う杉の計画的な伐採を行うことが林業の効率を向上させ、杉の利活用が進み、過大な杉林から風土に沿った植生への蘇りが期待できよう。イノシシを害獣として駆除する考え方を、共生と活用の思想に変える。あわせて、鹿も野ウサギも増加するだろう。このような風土性溢れる地域開発を再度推進したい。

一見ばからしいことかもしれないが、より広い目でみれば、残飯を焼却炉で燃やすエネルギーの無駄使いよりもましではないだろうか。ただ、このプロジェクトは、個人の思いつきでは不可能で、県単位か九州全体を捉えた取組をしなければ難しい。